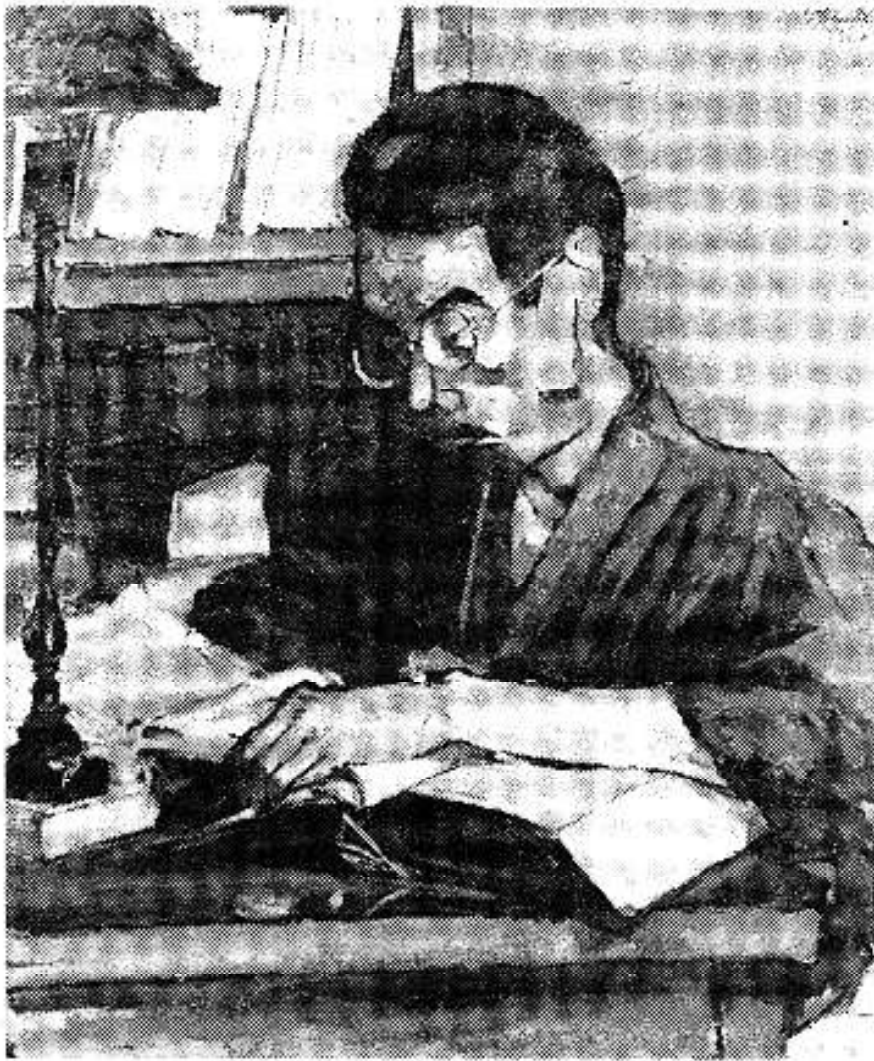




河上肇記念会会報

総会案内号

NO. 27

1987・9・15

一九八七年度総会御案内

酷しい残暑もようやく過ぎました。恒例の本会総会のご案内をお知らせいたします。

今年は、講師には山口河上会の細迫朝夫氏をお招きし、「新労農党と河上肇」と題してご講演を頂く予定です。

多数ご参会下さるようお願い申し上げます。

一、日時 一九八七年一〇月一八日(日)

午前十一時～午後三時

一、場所 法然院

(京都市左京区鹿谷御所ノ段町二四)

会場案内図(四ページ)参照

一、臨時会費 四、〇〇〇円(会場費、昼食費を含む)

同封ハガキにて一〇月九日までに出欠のご返事を賜われますようお願いいたします。(お手数ですが四〇円切手を貼って下さい。)

目次

一九八七年度総会御案内		(1)
真実を求めた柔軟な心		(2)
「全集」以後		(5)
中国訳目録稿		(9)
中国訳目録稿 (二)		(9)
一海 知義		(9)
米浜 泰英		(9)
会員通信		(15)
総会案内図(4)・編集後記		(20)

眞実を求めた柔軟な心

——河上さんの人柄とその著作から——

上 田 隆

歴史は人間が造り、ぬり替えて行くが、その永い歴史のなかでどの様に価値観が変り、たとえ多様化されても、永遠の人類の未来に展望を指し示してそこに真理を探索した先哲の遺した業績が、今も尚、私達の行く手に大きな輝きとなって生きるよろこびを与えて呉れる。

岩国がうんだ経済学者で思想家河上肇先生の生涯はまさにその事を如実に物語っていて、特にこの時勢なればこそ、その遺された言動は大きな警鐘となって胸をうつものがあります。

学者であった河上さんの遺された膨大な数の著作は、専攻とした経済学の分野の学術的なものは別としても、三大自伝のひとつとさえ云われる「自叙伝」を筆頭に、「貧乏物語」「祖国を顧みて」「獄中日記」等々、今で

も尚その純真な心の表白で一人の人間の生き方を克明に綴った著作には愛読者が多い。特に胸をうつ最高の傑作とされる「自叙伝」は幼少時代からその生涯の思想の一端を形成した吉田松陰を敬慕しつつ、宗教的真理と科学的真理の両立と云う独自の思想を完成し、その真理の普及につとめながら、理論と実践の統一と云う事で、単なる学究として書斎の中にだけとどまり得なくなり、道義感が先行し、不得手な実践活動の途上官憲の手に捕縛され、三年九カ月の刑期をつとめ、やがて、保護観察ながらも自由の身となる直前迄の波瀾に富んだ姿を一貫した信念を支えとして、人間らしく、ひたむきに写しだしているのを読むものをして、感動させずには置かない。

社会から遠く目を閉ざされた獄舎と云う環境の中でも、

文筆を愛し続け、その生活のさまを克明に記録した「獄中日記」は当時の世相も反映されていて余りにも生々しいその描写には感銘を受ける。

刑期半ばの頃、恩赦の報が獄舎中にまきちらされ、さすがの河上さんの心境にもそれから来る動揺はかくし切れがたかった様であったが……この時、ともすると、偉大な人格のかげにかくれてしまい勝ちな夫人の語りかけが、転向を本物化しようとする当局との間にあって、苦悩する河上さんの身上に大きな示唆を与えると云う話があり、夫婦愛を超えた美談以上のものとして心暖まる思いがする。

いったんその立場に到達したからには、たとえ「火にあぶられるとも、その学問的所信を曲げがたく感じている」と云う決意を述べている学者としての主人の面目を守る様、情理を盡くして説いた秀夫人の行動は実に見事という一語に盡きる。下獄し、主なき我が家にあって、その身を案じた以上に、学者としての夫の良き理解者であった事は、秀夫人自らの手で書き綴った便箋紙十五冊にも書かれた丹念な日記が「留守日記」となって世に出て居り、若し、此の原稿がなかったなら「自叙伝」のなかの「獄中記」の記述も、あれ程迄に見事には再現出来

得なかったのではないだろうか。その思いやりの深さは、涙なしでは読む事の出来ない頁が数多く、珠玉の様でもある。

私は、河上さん自身の人格は勿論であるが、秀夫人の力を借りてこそ、二人の美しい協和音が奏でられた様な思いがして、表面に出る事を務めてさけていた夫人の労を、心からねぎらいたい気持ちにかられてならない。

或る時、友人から人間を理解して行く上でどんな方法をとるか尋ねられた河上さんは、即座に、その人物に、始め百点を与え、それから欠点を徐々に減じていく事を披露しているのですが、この話などは、人間を根底から愛し切つてかかる優しい人間性の持ち主である事を裏づけるひとつの証左かも知れません。

京都大学で教授としていよいよその名を高めていた頃、愛弟子で秀才としても呼び声の高かった櫛田民蔵が、先生の学説の不備を強くついたと云う有名な話題が残されているのですが、その時河上さんは、弁解もなく素直にその教示を心快く受けとめて、自分の永年に亘って研究して来た学説を書き替えたと云う、これも又、柔軟な心の持主であった人柄を知るひとつの事実でもある。

こと、これぞと道を決めたなら、その道に向ってただ

ひたすらまっしぐらに真理追求を怠らなかったが、自分の学説に一たびあやまりを生じたと知るや、周囲に躊躇する事なく、一旦発刊した自著を絶版にして迄も万全に心を尽したその精神は敬服の限りである。

晩年は、良寛の心境を思慕し、又、中国の詩人、陸放翁を深く敬愛したが、その生き方の中に自画像を見たのかも知れない。文芸的にも秀れた作品を遺しているが、玄人肌でなく、批評をする人もいるが、作品以上の高く高い世界を、最も人間らしく生きた姿を考えつつこれらの作品に接するならば、作品の奥にひそむ意味が理解出来るのではなからうか。

同じ岩国出身で批評家、河上徹太郎氏は、その著「日本のアウトサイダー」のなかで河上さんの姿を評し「彼は正しいと思った道は絶対に行き詰り迄行つて見ないと引き返さない人だっただけに、その行動でも、清算が多数にある」と記している。河上さん程、その人生が赤裸々に批評の対象になった人物も少ないし、それだけに、まだまだ掘りださなければならぬ姿がある様な気がしてならない。

河上先生は敗戦の翌年、その波瀾多き六十八年の一生を終えられた。その生涯を一貫して流れるものは、身を

もって自己の弱さを克服しながら真実をひたむきに求めようとした柔軟な心の一生であった。

没後四十年を数える今でも、京都法然院に静かに休まれるそこから「人間を愛する清純な気持ち」で多様化する祖国をみつめている事でしょう。

(山口河上会会員)

総会場法然院案内図



『全集』以後(三)

杉 原 四 郎

はしがき

福沢諭吉協会の機関誌『福沢手帖』には、毎号新しく発見された福沢の書簡が紹介されている。時には今でも一度に二〇通以上も出てくることもある。福沢が歿して八〇年以上、その全集が完成して二〇年以上もたっているのにこうした状態だから、河上肇の場合も当分は書簡の発掘が相つぐことだろう。

現に、本誌の前号に岡山市の岸本竹志氏は岡山の社会運動家、中原健次が持っていた彼あての河上の手紙を遺族の方に探してもらっているとかいていた。河上莊吾氏によれば、山口県の大竹には河上肇の親戚にあてた手紙がのこっているとのことであるし、また河野健二氏によれば、河上門下で京大教授だった谷口吉彦あての河上の手紙数通が発見されたとのことである。

ここでは関西大学で百年史編集の過程で出てきた一通の手紙と、東京の古書展に出品された一門下生あての手紙を紹介することにしよう。

{一}

前者は河上が関西大学の教務の責任者垂水善太郎にあてた一九一五(大正四)年七月二九日あての手紙である。河上は関西大学(大阪市、福島学舎)に明治四三年以来欧州留学に出发する大正二年まで出講していた。担当は英文経済書や経済原論であった。彼は、大正四年二月に帰朝したが、関西大学は同年九月からの新学年に引つづき河上に受講してほしいと依頼してきた。今度発見された手紙はこの依頼に対する返事である。

私はこの手紙を、大正二年吉長正好・河上肇往復書簡―これについては『全集』以後(一)―を参照―とと

もに、関西大学『経済論集』第三七巻第一号（一九八七年五月）に掲載した「河上肇と関西大学」の中で紹介しておいた。ただその際最終校正の段階で病床にいたので、若干の誤記誤植が残ってしまった。そこでそれらを訂正した手紙の全文をここに掲載する。なおこの手紙の解説については、一海知義氏の懇切な御教示にあずかった。

拝啓 芳墨拝見致候。猶昨日は田島博士に面会、同博士よりもお話承り申候。

既に申上候如く、小生は今年は私立学校へは何処へも出勤致さざる方針にて、豫ねてより右様決心致居候事なれども、折角の仰ゆへ、更に再考相重ね候へ共、依然として可相成ば御辞退仕度決心致居候。多分財政学は神戸博士御担任の事かと存候。然らば同博士に原論をも御願被下候ては如何に御座候哉。小生は御承知の如く当地大学にても経済原論は受持ち居らず、殊に本年は貨幣論、交通政策等新規の課目をも引受候故、此上更に貴大学の為め原論の講義案相起し候事は非常の負担にて、既に再考相重ね候へ共、とても耐え得ざるべくと存候。もし神戸博士御引受無之候はば、小川博士に御依頼被下度、又小川博士御承諾無之候はば、津村博士は如何に御座候哉。

当地大学にては河田君御帰朝の爲め、山本君の時間も半減致し、且河田君も割合にお暇の事と存候故、津村君担任の政策論を他へ御廻しなされ候て津村君に原論御依頼の事も相叶可申と存候。御都合も可有之と存じ不取敢右申上候 勿々不一

七月二十九日

河上 肇

垂水学台侍史

河上はここで今年は私立学校に出講しないと書いているが、大正四年だけでなく、それ以後も、ずっと私学へ出講しなかったようである。私学だけでなく、東大の経済学部への出講を高野岩三郎から依頼されたときも辞退した。なお河上が京大で経済原論を正規の課目として担当するようになるのは、大正八年に京大の経済学部が創設されて以降、田島錦治と隔年交替で講義するようになってからのことである。

(二)

一門下生への手紙というのは、八木沢善次とその妻あてに長女朗子の出産を祝った手紙で、東京の古書店の目録に写真版がのっていたのを一海知義氏が見つけた、氏の依頼で米浜泰英氏が展示場にゆき、写真版では省略され

ている部分もふくめて写しとったものである。米浜氏によれば、以下がその全文である。

大正十一年九月二十一日（消印）〔封書〕

大阪市外浜寺町雲雀山 八木沢善次様御祝伺

京都市吉田町 河上 肇 大正十一年九月吉日

拝啓 久しく御無沙汰申上居候処承り候へば御奥様には御女子御安産遊ばされ御子様も御健勝にゐらせられし趣にて大慶至極に奉存候 如何遊ばされ候事やと御噂は致し居りながら御見舞申上候事相怠り居候為御安産の御事今日迄承知仕御快復遊ばされ候やう奉祈候

先は乍延引御祝詞申述度其如此御座候 可祝

大正十一年九月吉日

河上 肇

同 秀

八木沢善次様

御許へ

同御奥様

八木沢善次への手紙は全集にはおさめられていないが、その名前は櫛田民蔵あての書簡に出てくる。彼と河上肇との関係について細川元雄氏に調査をお願いしたら、つ

ぎのことが判明した。

八木沢善次は一八九四年栃木県に生れ、一九一七年京大の法科大学政治経済学科入学、一九二〇年同法学部政治学科を卒業、同年大原社会問題研究所の助手に採用された。上記の手紙は、八木沢が大原社研に勤めていた時代のものである。彼は一九二三年そこを退職し、中央大学教授となって東京に移り、二七年同大学を退き、東京の諸研究所で活躍、戦後中央大学にもどった。

彼と河上との関係については、彼が昭和五年に啓明社から出版した『経済思想史論』の序に、つぎのように書かれている。彼は中学生時代から農村問題に興味をもったが、ひたすら農業または農村のみを見ていた自分にその誤りを気付かせたのは恩師河上肇の『貧乏物語』であった。

「私は農村問題を社会問題の一部として広い視野から眺めなければならぬ、それには全社会の総般的な経済問題を一応考察してからにしなければならぬと考ふるに当然至った。其れは私を経済学に導いた。そして私は大學生生活中許されて河上博士の門に親しく出入するの光栄に浴した。博士と親しく膝を交えている時は経済学よりは寧ろ経済学者、然り、社会改造の熱意を胸一杯に抱け

る一個の人間としての経済学者を博士から私は聴いた。
幾度となく繰返されたその感激の時を私は私の一生の光
栄として生涯忘れないであらう。」

なお河上肇文庫には、ラッセルの『民主主義と革命』
を訳した八木沢の原稿（『我等』の原稿用紙）が残って
いるとのことである。

日本河上肇著
郭沫若譯

社會組織與社會革命

莊閑題



中国訳目録稿 (二)

一海知義
米浜泰英

4 唯物史観研究

一九二一（大正一〇）年八月二五日、弘文堂書房発行。
菊判、序五頁、目次四頁、本文三三六頁。「第十九版の発行に際して」（一九二四年三月一日）、「第二十四版序」（一九二五年二月二〇日）。なお第二十四版で若干の注を補足。第三〇版（一九二六年三月二〇日）が最終版である。

⑤ 唯物史観研究

鄭里鎮訳 一九三〇年三月初版 上海・文華書局印
行 訳者綴語二頁 目次六頁 本文二一七頁 定価上
製一元六角 並製一元二角 奥付には「訳者 立教大
学経済学士鄭里鎮」校閲 早稲田大学政学士鄭斌」と
ある。「訳者綴語」の和訳をつぎに掲げる。

「（一）近年わが国の社会には、マルクス主義を研究

する人がしだいに多くなってきた。しかしマルクス主義に関する各種の出版物をみると、価値あるもの絶無とはもとより言えぬが、勝手な解釈をしたりでたらしめな批判をしているものもまた非常に多い。そこで本書を訳して、わが国の学界がマルクス氏の学説を研究するための資料としたい。

（二）およそ一つの主義に対して、それを信仰するにせよ反対するにせよ、真の理解がともなわれないならば、信仰も堅固とはならず、反対も弱体となり、きわめて安易に他人に惑わされてしまう。影響の及ぶところ、社会もまたふらふらと足元の定まらぬ情況に陥ってしまう。近ごろの中国の青年は、昨日は国民党かとおもえば今日は共産党といった状態で、こうしたことになるのは、一部の投機分子や出世金儲けに専念する

者や胸中これといった主義のない者は別として、実は思想が動揺し、しっかりした主張をもっていないことに起因しているのである。

(三) 此の書は日本の河上肇博士が著わしたものだ。その特色は、マルクス氏自身の用語を詳細に解明し、マルクス氏の用語の意味を実証したことにある。

つまり最も難解な唯物史観の用語について、学習者たちについて一つの明白な観念を与えたことにある。河上氏は日本の最も著名なマルクス経済学者で、マルクス氏の学説に関しても著作がたくさんあり、日本の社会思想は河上氏の影響を少なからず受けている。しかし河上氏は共産党の黨員というわけではない。これは河上氏がマルクス氏の学説を真に理解していて、日本には共産主義を実行する物質的条件がまだ備わっていないと判断しているためなのかもしれないが、よくはわからぬ。

(四) 胡漢民氏の著書『唯物史観与倫理之研究』および李季氏の訳された『通俗資本論』のなかの訳語を本書で採用させていただいたところがある。このことをとくにおことわりしておく。

(五) 訳書には本来直訳と意識があり、それぞれに特色がある。本書がほとんどすべて直訳を用いたのは、

原文の語気をのこしたいと思ったからである。ただ多忙のなかで執筆したため誤りが多々あるかもしれない。読者のお許しを乞う次第である。

民国十八年五月一日

在広州 鄭里鎮

初版を上海図書館が所蔵する。北京大学図書館所蔵本は、手許のコピーが奥付欠如のため第何版か不明。

5 社会組織と社会革命に関する若干の考察

一九二二（大正一一）年一二月五日、弘文堂書房発行。菊判、序五頁、目次九頁、本文五九〇頁。

⑥ 社会組織与社会革命

郭沫若訳 一九二五年五月初版 上海・商務印書館発行 原序二頁 目次六頁 本文二八八頁 定価大洋一元六角

本訳書は、一九五一年の改訂版に付された郭沫若の序によれば、刊行後まもなく発売禁止にあった。本書には訳者の序はないが、レーニンの文章の翻訳である下篇第六章「政治革命後俄羅斯之經濟的地位」の末尾に「沫若附白」と題する小文が付されており、その和訳をつぎに掲げる。

「この章の最初の稿も日本文より訳出したが、のち

に何公敢兄から雑誌“Soviet Russia”を借りて一通り対校した結果、改正すべきところが少なからずあった。日本語訳と雑誌の原文との間には多少の異同があったが、重要な点に関わらないのもとのままとした。ただ、末尾の一小節は日本語訳では完全に省略されていたが、この部分は特に補訳して完璧を期した。日本語訳者が扱った英語単行本およびドイツ語訳本がともにいまだ入手できないのはまことに残念である。この文章は社会革命の過程において非常に重要であり、わが国の人士もこれに対して誤解している者がかかなり多い。一部の人たちはレーニンが改宗したと思ひ、その例としてこれを引き、中国の現状のもとで個人資本主義を提唱しようとしている。これはまことにレーニンを冒瀆するものであり、社会に害毒をのこすものである。この文章を訳し終えて、レーニンの聡明さと偉大さをいやが上にも感じ、哀悼の情がまたしても胸をゆさぶり、涙の溢れおちるのを禁ずることができない。

民国十三年七月一日 夜半対校の後にこれを記す
初版を上海図書館、京都大学経済学部図書館、河上莊吾氏が所蔵する。河上莊吾氏蔵本には、河上の筆蹟で

「一九二五年十一月十日入手 河上肇蔵」としるされている。

⑦ 社会組織与社会革命

郭沫若訳 一九三二年五月五版刊行 嘉陵書店發行
原序二頁 目次六頁 本文二九三頁 定価一元四角

本書はさきの一九二五年の商務印書館版が刊行まもなく発売禁止にあつたため、改版して刊行されたものと思われるが、それについての言及はなにもない。訳文は前の商務印書館版のままである。初版の刊行年月日は不明であり、第五版を北京大学図書館が所蔵する。

⑧ 社会組織与社会革命

郭沫若訳 一九五一年四月初版刊行 商務印書館發行
序三頁 原序二頁 目次四頁 本文二六三頁 定価人民幣一七、〇〇〇元 初版三〇〇〇部發行

新たに付された訳者の「序」が本書出版の事情をよく伝えているので、その全文の和訳をつぎに掲げる。
「河上博士のこの『社会組織与社会革命』は、一九二四年の春から夏にかけて私が翻訳したものである。一九二五年五月に商務印書館から出版したが、刊行後間もなく発売停止になった。そのため本書が世間に流布した数はごくわずかであった。

商務印書館はいままた本書を改訂して再版を出したいと、初版本を送ってきて私に改訂するよう求めてきた。しかし私はどうしてもその時間がとれなくて、やむなくお断りした。そこで印書館側は呉沢炎氏に編訳をお願いして詳細に改訂をおこない、それをまた私に送ってきて、「多忙中暇をみて校閲」するよう求めてきた。たまたま私はまた近いうちに国外へ出かけようとしており、目をとおす時間をどうしてもみつけないとができなかった。私はわずか数頁をみただけであるが、呉氏はまちがいなくたいへん「慎重に作業」されており、氏の改訂されたところは私のもとの訳と比較してずっととおりがよくなっていた。

印書館側と呉氏がすでにこのような多大の苦心を払われて本書の新たな再版を準備されたのであるから、私の方としては当然再版に同意した。本書は古くなっただけでも、そう大きな欠陥はないと思う。読者は、マルクス主義の経済学的側面に対して、理解するためのいくらかの援助を本書からひきだすことができるだろう。

著者河上肇博士は本書を執筆したとき、進歩的経済学の一教授といったところで、マルクス主義は日本

でまだ啓蒙の時代にあった。マルクス主義の日本における普及には、河上博士がその功労者であることは誰しも否認できない。そして中国初期のマルクス主義者の多くも博士を媒介にしてはじめてマルクス主義に近ずいたのである。

はかならぬ私自身がその生きた証人である。私がマルクス主義へ転向しそこに定着するについては、この書を訳したことがたいへん大きく作用したのである。

もとより本書を訳出する以前に、革命的心情と要求はすでに私のなかにあったのだが、マルクス主義をいま一步深く理解したいというねがい、私にこの書を訳す決心をさせた。訳し終えた結果、私は確実に文芸運動の陣営から革命運動の戦線へと転進したのである。

本書を訳出したことは、私のマルクス主義理解には役立ったけれども、翻訳した当時、すでに私は全面的には満足できなかった。というのは、本書は全体にわたって学術的な論争に偏っており、マルクス主義の根幹——弁証法的唯物論——に対してはまったく言及されていないし、またマルクス主義の実践——どのように世界を改造するか——ということに関しては、ほとんど回避する態度をとっている。こんなふうにマルクス主義を

紹介することは、マルクス主義を軟骨症にしてしまう
と言えよう。私のこうした不満は、かつて翻訳を終え
たのち成仿吾に宛てた手紙（訳者注 平凡社刊東洋文
庫『続創造十年他―郭沫若自伝3』一五頁以下参照）
のなかで表明したことがある。私自身はこの書を踏み
台にして一歩前進したということができる。私は今日
この書を読む初学者が、またこれを踏み台にしてさら
に前進することを希望する。

河上博士自身もまた前進した。彼は人道主義的経済
学者からすすんで社会主義者となり、後さらに進んで
日本共産党の党员となった。入獄した五年間終始一貫
して節を曲げることがなかった。出獄の後一九四六年
一月、彼は病死した。日本人は彼を「日本の文化革命
の最も偉大な戦士、先導者、父親」であると讃えた。
彼の日本の文化界における地位は、分野はちがうが、
魯迅のわが中国文化界における地位に似ている。

真のマルクス主義者はよく大衆と結合し「実践のな
かで理論との一致を追求しながら、自己批判を不断に
きびしく行うことによって、自己を改革するとともに
理論の発展をおしすすめていくのである。河上肇は疑
う余地もなくこの種の先進者の一人に数えられる。

晩年の彼は自分の生涯の著作すべてに対して不満をも
っていたそうである。本書もまた当然のことながら彼
の満足した仕事であったはずがない。

しかしくりかえしているならば、本書はなお一読の
価値を失っていない。マルクス主義経済学の分野にお
いて、入門書としてわれわれに一定の援助を与えうる
ことは確実である。

私は呉沢炎氏に感謝しなければならない。わたした
ちはお互いに面識はないが、呉氏はたいへんな苦勞を
されて訳文を改訂され、それを一層中国文らしくされ
た。呉氏はなおいくつかの貴重な御意見を提出され
たが、私はそれらをここに一括して掲載しておきたい。

「河上肇の原文には、彼自身の認識が必ずしも正確
とは言えないところがある。ソ連に関する部分は、
当時の情勢がまだ定まらなかったもので、彼の発言も
完全には的を得ていない」

これはまったくそのとおりであり、読者が注意する
よう希望する。

「書中にトロツキーの発言が三箇所あり、削除した」
私は完全に同意する。河上肇は死んだけれども、彼
もまた完全に同意するであろうと私は信ずる。

「下篇第六章はレーニン著「農業税の意義を論ず」を翻訳したものであるが、英語・ドイツ語訳から重訳したものであり、ロシア語原文（レーニン二巻選集本の下巻）と比較すると若干の相違がある。これは削除した方がよさそうである」

私はこの部分はやはり残しておいた方がよいのではないかと思う。「若干の相違がある」としても、歪曲や誤まりといったものはないので、残しておいた方が書物全体の内容を一層的確にするし、また河上博士が当時前進しようとしていた方向をも明らかにしてくれるのである。

私がこの新しい改版の訳書について書こうと思ったことは、大体以上のようなことである。ただ次のようなおことわりというかお詫びを申し上げておかなければならない。――私は近いうちに中国を離れて第二回世界平和擁護大会に出席することになっているため、ひととおり見なおす時間がどうしてもとれない。もしなにか不適切な部分があるとすれば、その責任は私が負うべきものである。

刊行のあとで、また読者の批判を拝聴することとしたい。

河上肇博士的经济思想与科学精神

——纪念河上肇博士诞生一百周年

朱 绍 文

河上肇博士是日本著名的马克思主义经济学家，优秀的社会评论家，社会主义运动的倡导家，而且还是一位诗人。1879年10月20日，他出生于日本山阳县玖那郡岩国町，父亲担任过村长和小学的哲学。是一个有教养的家庭。今年10月20日，正好是河上肇博士诞生一百周年纪念。他那刻苦勤奋的一生，在日本留下了深刻的思想影响。作为一位日本现代上的大思想家，京都大学的同学们每年春季举行“河上祭”，以纪念河上先生，宣传继承“河上精神”，维护和平、民主与自由。

1927年，河上肇博士的著作就已传入我国。1930年之后，我国很多寻求进步的知子更从河上肇博士的《经济学大纲》和《资本论入门》等著作中，获得了马克思主义经济理论启蒙和斗争的武器。差不多大半个世纪以来，直到今日，河上肇博士一直是最为我国人所崇拜和学习的对象。

本書の初版を北京図書館が所蔵する。

北京にて

郭沫若

一九五〇年十月二十三日

会 員 通 信

今年は河上肇出獄五十年。現代を見ますと身が引き締まる思いがいたします。河上肇記念会会報、お送りくださりありがとうございます。東京河上会会報五七号ができあがりましたのでお送りいたします。なお勝手なお願いですが、以後会報を三部で送付お願い致します。

東京河上会事務局長

藤 原 良 雄

私は京都帝大で河上肇博士と西田幾太郎博士のお二人から終生忘れることの出来ない教育を受けました。法然院と哲学の道を偲んでいます。

和泉市 丸 島 誠

会費送りました。いろいろ御世話

おかけしております。事務局のお仕事は大変ですが頑張ってください。皆様のご健祥を祈り上げおります。

長野県穂高町 平 井 重 男

岩波文庫の自叙伝（全五冊）は廃版または休版の様子ですが、もし貴会のご配慮で入手できますならばご恵送下さるならば幸甚に存じます。

豊栄市 有 田 惣二郎

（事）残念ながら事務局にも方途ありません。

会報面白く大変参考になりました。有難うございます。新刊紹介の「獄中書簡」は是非読みたいと思います。本年の会費お送りします、今後共よろしくお願い申し上げます。

金沢市 苗 加 武 雄

平和と民主主義にとって目に見え

ない、名状しがたい暗雲がおおいつある、健全な市民として生きるとさえ難しい気配が。この会がそんな市民への励ましとなることを願っています、発展を祈ります。

京都市 山 崎 利 一

年会費の残りは何かの役に立てて下さい。

岐阜県本巣郡 説 田 千 春

会費をお送りいたします。今、全集の「日記」・「自叙伝」を読んでいます。改めて深い感銘を受け心を洗われています。記念会の発展を願ってやみません。

熊本市 井 上 栄 次

お世話人の方々の御苦勞に対し心から敬意と感謝をいたします。あの悲惨な第二次世界大戦が終わってか

ら四二年たちましたが、再び我国に軍国主義・ファシズムの復活の動きが見えます。昭和初頭に、あの天皇制の弾圧下に真理と正義のために敢然としてレジスタンスの道を選んだ河上先生の勇氣と情熱をその時代背景と合わせて真剣に考えてみたいと思います。

豊中市 後藤 嘉七

会報二五号いただきました。大変興味深い内容です。

茨木市 岡橋 穠

岩波文庫に河上先生の評論集が入ることを知り大変喜んでいました。偉大な人物とその思想が若い世代に継承されるのでなければ折角の貴重な精神的遺産を生かせないことになりました。本年度の会費をお送りします。日頃、会の世話をして下さっている

方々の御苦勞を感謝します。

和歌山市 竹中 章

会報二五号拝読しました。ずっと会報を拝受しながら会費をお送りしておりませんが三年分として御受納下さい。

京都市 佐野 大義

左脚を痛めており、他出不自由にて残念です。

京都市 田中 真三郎

お便りありがとうございました。

早速入会させて頂きます。昔からの河上・山宣のファンの一人と理解して頂きたいと思っています。三年分の会費とカンパをお送り致します。

仙台市 高橋 康則

(事) 河上墓前に名刺受けがあり、安井氏がお世話なさっておられたこ

とはご承知の通りです。安井氏と他界後、月に一・二度事務局が出向いています。名刺を見付けると懐かしい知人に合った感です。記念会からの礼状(会報残部ある時はこれも同封)を差し上げています。こうして入会のお便りがあると、法然院への足が軽くなる思いです。

少しですが残余のお金は会に寄付します。過日の父(事務局注 安井功氏)の為の法然院での催し、会の方々のご高配に改めて御礼申し上げます。時節柄会の皆様様の御自愛の程お祈り申し上げます。

京都市 森田 茂

河上肇記念会会報を毎度お贈り下さいまして有難う御在ました。今日、先生御夫妻の墓前にぬかずき得ましたので最後のお礼を申し上げます。

法然院にて

名古屋市 山口 幸一

今回河上会に入会を申し込みたく
思ひお便りをする次第です。私が住
んでおりますのは浄土寺西田町で銀
閣寺交差点の少し西側、吉田山の北
東にあたる地域に居住しております。
以前から（京大に一九六五年入学以
来）河上肇の名前は聞き、「自叙伝」
を読んだりしておったのですが、今
回共産党専従の生活から市議員に
なったのを機会に再び近くの法然院
にあります河上肇夫妻の墓に参りま
した。私、立候補を決意した時から
今後できることなら、以前タクシー
の運転手さんで安井さんという方が
やっておられた墓参者へのお礼の通
信を発送する役割をお受けすること
ができたと思うようになりました。
毎年一月三十日には墓参しており、

今後毎月二・三回は墓守りをする
ことができると思っておりますが、
この件どうか私の希望を受け入れて
下さいますようお願いする次第です。

京都市 山本 正志

（事）御入会、それに誠に結構なお
申し出ありがとうございます。名刺
の件は事務その他の都合もあり今暫
くは事務局が担当いたします。いよ
いよの節はよろしくお願い致します。

山口の地にもようやくにして河上
先生顕彰の気運が見えて来た様です。
機関誌、いつも躍進が感ぜられまし
て喜んで居る者です。中央の動きも
なる程大切ですが、地方に在って黙
々と河上精神を活かす事に頑張って
居られる会員の皆様の動向とか声欄
が最近はお省かれて来ている風に思え
淋き限りです。小さな力が集積され
て大きな力となるのではないでしょ

うか。一考を願います。次号を楽し
みにしつつ。

防府市 上田 隆

（事）お説の通りかと存じます。事
務局もその方向で努力しているので
すが力量不足です。会員各位の積極
的な役割（会費納入や総会出欠の返
信の折にでも一言）を期待しており
ます。

八五年度総会でどんな事があつて
も国家秘密法に反対を主張された田
村敏男さんの御逝去を悼みます。御
冥福を祈ります。河上肇獄中書簡集
を読んでいます。先生並びに御家族
周囲の人々の心のあたたかさをつく
づく感じています。下巻も楽しみに
しています。

堺 小田 正大

毎年手厚きお世話を戴き、誠に有難うございます。法然院の集い・御法要そして御墓前にお参りして心を洗い、また新しい一年の旅に出ることになります。何卒よろしく御指導下さい。

堺 広岡 正次

会費一九八七年分をお送りします。なおテレビ評伝「河上肇」のビデオテープを一本斡旋していただけないでしょうか。

岩国市 河上 莊吾

会費御送りします。残金はカンパとして御取り扱い下さい。売上税反対で頑張りましょう。

都城市 小野 総一郎

大阪市立婦人会館自主グループ連絡協議会のお世話を致しております

たので欠席を重ねておりました。今年は紅葉の法然院を訪ねて先生の墓前へお参りしたく存じております。

大阪市 福永 照子

記念会会報二五号落手致しました。今年は年四回刊行とのことですが大変だと思えます。元気で頑張ってください。

田川市 大村 優

河上先生の御葬式をお世話した一人として河上会の総会等に出席したいのは山々ですが、健康上の都合にていつも欠席、残念至極に存じております。

堺市 藤谷 謙二

「ファントム訴訟ニュース第二十二号」送付（大門英太郎宛）

小松市 村中 嘉明

いつも御世話になっていきます。ウソとペテンの中曽根内閣は、ことアメリカに対しては忠実で国会の仕事も年々大変になります。売上税反対の国民の怒りの声は目に見えて力になっていきます。世論と行動を大切に政治革新にお互いに努力しましょう。

京都市 寺前 厳

素人の河上肇論・河上肇観を特集記事にして毎号一・二編掲載する予定はいかがでしょうか。学者・専門家のそれも結構ですが、素朴な素人論もまた味があるのではないでしようか。

滋賀県 前川 文夫

（事）誠に結構な御提案かと思えます。以前にも何度かこういう御提案があり、一人二人の寄稿はあるのですが、後が続きません。再来年は河

上没後百十年になります。事務局でもぼつぼつ計画が始めています、会員各位の積極的な御提案・企画を要望致します。前記上田氏のお説もあり、その一つとして私個人は素朴な河上論、例えば「河上肇と私」特集もいかがかと思っております。会報で順次掲載して行きたいと思えます。是非御寄稿を随時お願い致します。

(紀平記)

一九八七年度会費二人分お送りいたします。十月の総会を楽しみに致しております。

福岡市 麻生泰一・正子

会費その他寄付金お送り申し上げます。長男が経済学部を受験することになりました。これもご縁と存じます。

京都市 飯塚 平吉郎

右傾化のすすむ情勢の中で貴会の御発展の意義が大きいことを確信しております。

京都市 橋本雅弘

会報二六号の三三ページに紹介されております「地方文化の会(岩国)編、総合雑誌―二十一世紀―河上肇特集」の発売元をお知らせ下さるよう勝手ですがお願いします。

熱海市 末永和明

会報二六号ありがたく落掌しました。杉原四郎先生の御病状を案じております。幸いに比較的軽いとも伺って愁眉を開いております。会報巻頭の「全集」以後(二)に拙著を御紹介いただき恐縮しております。六月十四日(日)東京河上会に招かれて、住谷一彦さんの司会で「河上肇の現代化」というテーマを与えられ

て音読会のことを話しました。櫛田ふきさんも見えました。六月二十七日(土)銀閣寺近くの白沙村荘で音読会主催の小生送別会に東京から出向き「二都物語」と題して長広舌をふるいました。羽村二喜男・西山卯三郎先生はじめ五十数名が参加して下さいました。一海さんの獄中書簡集と岩波文庫の評論集を紹介しました。

東京都 塩田 庄兵衛

老生明治三十年六月十三日生まれでありまして、去月満九十歳の誕生日を迎えました。九十歳といえバスーパーオールドであります。さて会報第二六号を本日(七月一日)受け取りました。早速精読致しましたら「昭和六十一年度河上肇記念会総会特集」の出席者のスピーチよりの十一・十二ページにかけて、先生より十九世紀からの声の一人に選ばれて

スピーチして賜ったこと、老生にとりては無上の光栄にて深い感激に打たれました。満場の会員の前に御披露賜った栄誉のありがたさ、身にしてみての感激でありました。ここに謹しんで満腔の感激感謝の意を捧げ奉ります。全国からご参会された俊英の会員諸兄姉に本会の大御所である先生からご発表下さったことは老生

一代の栄光であります。四国の辺地に住み河上精神を生涯の指針として、この上命ある限り一步でも前進したい、それが生き甲斐だと信じています。(大門英太郎宛)

徳島市 三村文一

(事)早速会報を開き該当ページを見ましたら「三浦文一さん」と誤植

されております。何度も校正しているのですが、お名前を誤り誠に申し訳ありません。改めてここにお詫びして訂正いたします。それにしましてもご健康が許しますならば今年度の総会では肉声のスピーチをいただけたらと願っております。

編集後記

総会案内号をお届けいたします。ご都合のつかない方は是非通信下さい、会報充実のため。

今春入学した大学生のレポートに、「……一時農業に従事しようと真剣に考えたことがあるが、……飯が食ってゆかれないことを親に言われて断念……無限の太陽エネルギーを利

用し、すぐれた土地に働きかけ、自然の生態系との調和のもとに再生産を繰り返すすばらしい産業であるはずの農業に従事して食べてゆかれないのは何故か……」といきなり書かれている。日曜百姓に「潤いのある」生活と自己満足していた私に子供たちからの鋭い問いかけであった。猛暑私は全集第一巻を繙く。時代の問いに河上は自分の身近なことから説こうとしている。(細川記)

『河上肇遺品展図録』

(昭和四八年刊行)

ご希望の方は、一、五〇〇円
送料三〇〇円、計一、八〇〇円
を左記にお送り下さい。

〒606 京都市右京区嵯峨観空寺
明水町三七 細川元雄宛

入会のすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満十五年になります。毎年秋には、河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介します。下さい。



会報(回覧雑誌)

河上肇記念会 会 則

- 一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市(または京都市)に事務所を置く。
- 二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。
- 三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。
- 四、毎年一回総会を京都で開き、その他随時集会および事業を行う。
- 五、この会の会友および世話人は別の定めによつて選び、総会において承認を与える。
- 六、世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。
- 六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもつてあてる。
- 七、この会則の改廃は総会の議決による。

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は
事務局へご一報下さい。

〒五四二 大阪府南区島ノ内一〇一〇一九

(丸善石油ビル) 千代田商事株式会社内

河上肇記念会



貧乏物語 初版

〒 542

大阪府南区島ノ内一〇一〇一九(丸善石油ビル)

千代田商事内 河上肇記念会

電話 (〇六) 二五二一三六九六

振替口座 大阪 三一三一九五

京都(きょう)に「煙」あり

1965年 創刊 只今50号

「煙」同人社

京都市中京区西ノ京藤ノ木町11の24

児玉 誠 方

電話 京都 (075) 811-7646 番

振替 京都 2-15653 番

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名(74~84才)が出している異色の同人誌。語り部として戦前活動家の埋もれた青春像の発掘を柱に「煙」を編集・発行する一面、同時に戦後への架け橋たらんとしてもいます。

A5版 120頁 頒価 500円 〒200円